

# 発見! おごおり遺産

No.21 十三仏じゅうさんぶつの信仰



二森辻堂の十三仏



稲吉の十三仏

市内を歩くと、たくさんの石像が一緒にまつられている場所があります。今回は、その中でも十三仏にまつわる信仰を取り上げます。

供養の日	本地仏
初七日	不動明王(ふどうみょうおう)
二七日(ふたなのか)	釈迦如来(しゃかにょらい)
三七日(みなのか)	文殊菩薩(もんじゅぼさつ)
四七日(ししちにち)	普賢菩薩(ふげんぼさつ)
五七日(ごしちにち 35日)	地藏菩薩(じぞうぼさつ)
六七日(ろくしちにち)	弥勒菩薩(みろくぼさつ)
七七日(しちしちにち 49日)	薬師如来(やくしにょらい)
百ヶ日	観世音菩薩(かんぜおんぼさつ)
一周忌	勢至菩薩(せいしぼさつ)
三回忌	阿弥陀如来(あみだにょらい)
七回忌	阿闍如来(あしゅくにょらい)
十三回忌	大日如来(だいにちにょらい)
三十三回忌	虚空蔵菩薩(こくぞうぼさつ)

十三仏

**+** 三仏信仰とは、亡くなった人の13回の追善供養(初七日〜三十三回忌)をそれぞれ司る13の仏を信仰することです。

古代のインド仏教では、亡くなってから次の生を受けるまで七日×七回(四十九日)と考えられていましたが、それが中国に伝わり、道教の「十王思想の影響を受けて、十の仏(本地仏)が選定されました。その後、日本で室町時代ごろにさらに三仏が加わり、十三仏信仰が完成しました。なお、三十三回忌をもって年忌仏事の最終回とする「弔い上げ」の風習が全国で見られます。これは、亡くなった人が仏様から家の守り神になることで、インドの輪廻思想とは異なる日本独自の信仰形態と言えます。

この十三仏信仰は、死者の供養という人々に密接な信仰であり、現在も全国に多くの札所霊場があり、「十三仏まいり」が行われています。

小郡市内にも十三仏が見られます。二森の辻堂は、明暦3年(1657)の大日如来像があるなど、江戸時代から続く長い信仰の歴史が感じられる場所

です。ここでは市内でも珍しい十二神将像とともに、十三仏がまつられています。昭和7年(1932)に「二森大師講中」によって造られた一体型の像で、十三仏に毘沙門天と弘法大師が加わって十五体となっています。

稲吉の老松宮の西側にある阿弥陀堂の隣にも十三仏があります。この石像はそれぞれが独立しており、明治14年(1881)に造られました。

下西鰯坂の古刹である普濟寺の境内には、十三仏に馬頭観音などが加わった十六体の石像があります。土台の基礎石には奉納された大正13年(1924)の銘があります。

大板井の福聚庵(長福寺)は、古い歴史を持ち、江戸時代に再興されました。安永7年(1778)に久留米藩が定めた筑後三十三か所霊場の一つでもあります。十三仏は境内の御堂にあり、大正11年(1922)に建納されたことが分かります。

私たちに身近な追善供養ですが、その成り立ちや歴史を知ると、また気持ち新たにになります。

問合せ先 文化財課 ☎75・7555

おごおり遺産とは?》近年の市内調査で「再発見」した文化遺産=市民のたからのこと